

慶州の秋

—韓国文化の源流を歩く—

増子 耕一(文)*
題府 志郎(写真)*

全斗煥大統領は慶州の町を巡回した1982年3月27日、「88年オリンピックはソウルで、観光は慶州で」という方針を発表した。それに従って5カ年計画の「慶州観光総合開発」が立てられ、86年までにすべて計画内容が実現することになるという。半島東南部に位置する慶州は、古代三国時代から統一新羅王朝まで、約千年間の栄華を誇った王都だった。そして飛鳥から奈良時代にかけてのわが国にもたらされた仏教文化の内容には、絶大なものがあつた。しかしその後、幾たびもの戦乱のなかでこの王都はその文化を語る多くの遺産を灰燼(かいじん)に帰してしまつた。その遺跡は、今日復興したものもあり荒れはてたまものもある。いま国際的観光都市として成長しつつあるこの古都を訪ね、その過去と現在を探り歩いた。

1. 新羅の工匠祭る

1.1 芸術精神継承めざす

「鶏林」という言葉は、わが国でも昔から韓国の代名詞として使われてきた名称である。

新羅でこの国号が最初に使われるようになったのは307年のことで、その名称は、主族の1つである金氏の始祖の誕生の物語に由来する。

第4代の脱解王のとき(60年)、部下が夏の深夜

に月城の西里を歩いていると、林の中から大きな光がさすのが見えた。紫色の雲が空から地面をおおい、雲の中には黄金の櫃(ひつ)が枝に掛かっていた。光はそこから発し、白い鶏(にわとり)がその枝の下で鳴いていた。そのことを王に知らせると、王はその林にお出ましになり、櫃をあけると中に男の児がいた。王が子供を抱いて宮殿に帰ると、鳥や獣たちも喜びながらいっしょについて来たという。

林の中で鶏が鳴いたことからこの林は鶏林と呼ばれるようになった。この林は、慶州市街の東南のはずれにあつて、月城址(し)と隣り合わせになっている。にれとけやきの巨木がおびただしくはえていて、何とも霊妙な空間をつくりあげているのだ。

10月のある晩のこと、この鶏林の西はずれにある奈笏王陵の前の赤松林で、小さな「新羅文化祭」が開かれた。

まっくらな夜道を土地の老若男女がやってくる。松林の中の30メートル四方の空間が電灯の光で照らされており、その空間の王陵の側に祭壇がしつらえてあつた。そこにあげられているのは、高さ3メートルにもなる、赤のトサカの鮮やかな、白い鶏の像である。羽を広げ首をのばして、ときときの声をつげている姿だ。

この祭りは、今から30年前に民間ではじめられたもので、祭られているのは、新羅の工匠たちだという。

「新羅文化を創造した、無名工匠たちの業績をたたえ、その芸術精神を受け継ぐべく新羅の理解者たちが集まってはじまりました。毎年行われているものです」と、慶州古跡発掘調査団の1人、李鍾聲氏は言う。

工匠たちというのは、古代の仏師であり、建築士であり、陶器師であり、金冠細工師である。

1.2 ユーモラスで楽天的

祭主は趙慶珪氏という坊さんで、今年80歳になるという。孤児たちを育て、土地の人々から最も徳の高い人物だと尊敬されている。

鶏の像の前でおごそかに祖先の徳をたたえた趙老人が、五体投地の礼拝をしたのに続いて、参列した国会議員や大学教授、文化財研究所の所員らが次々に礼拝する。それにつづいて踊りや歌や仮面劇がその前でくり広げられた。

ピンクに赤と金のししゅうの入ったチマ・チョゴリを着た少女たちによるカヤグムの演奏と歌。老人の吹く肅々(しゅくしゅく)とした笛のソロ。ソプラノ独唱。シャーマニズムとキリスト教の出会いの葛(かっ)藤を演じた劇「乙女」。そして学生たちによる安東河回仮面劇。

この仮面劇は、身分の低い屠(と)殺人が牛の臍(こう)丸を貴族たちのところへ売りにいったところ、大勢から売ってくれと懇願される物語だ。太鼓とドラのリズムに乗って演じられる風刺劇である。

それを老婆たちが地べたに座ってにこやかに笑いながら見ている。時折、たき火がはぜて枝の焼けるにおいが風に乗ってくる。

そして第2部は、5人、6人と輪になって、持ち寄ってきた山のようなモチやキムチやカルビをつつきながらマッカリを飲み、おしゃべりにふけるのである。

新羅の文化は歴史の古い層に属するもので、今日の韓国を規定しているものからは遠い。「しかし古い新羅的なものは今も大衆の中に残っている」と、東国大学新羅文化研究所の李箕永教授は言う。

「慶尚道の人々はユーモラスで楽天的。とくに女性たちは歌ったり舞ったり遊んだりするのが大好きで、少し官能的なところもあります」

鶏林という国名もユーモラスで、いささか威厳

には欠けるところがあるが、しかし三国を統一する武人もまたこの鶏林の国から出現したのである。



「鶏林」第4代脱解王の古墳

2. 雁鴨池よみがえる

2.1 使節の往来は頻繁

新羅千年の宮殿は月城に造営されたが、今ここに残っているのは石氷庫がひとつと、城の輪郭を示す松の並木だけである。何もない広々とした原が広がっているばかりだ。

王宮が拡張されて、月城の東隣に雁鴨池(アナブチ)と呼ばれる東宮が造られたのは、半島統一の大業を果たした文武大王の時(674年)だったという。

7世紀の韓半島は騒然としていて、めまぐるしく事件が展開する。高句麗、百濟、新羅の三国間の争いは激しくなり、百濟は新羅と唐の攻撃を受けて660年に滅亡。高句麗もまた668年に滅ぶ。

こうした動乱の中で、日本の斉明天皇は百濟救援軍を送ったが、663年、白村江の戦いで唐と新羅の連合軍に敗れて多くの百濟人とともに撤退した。斉明天皇が筑紫朝倉宮で亡くなると、次いで天皇の地位についた天智天皇は冠位二十六階を制定し、百濟人70余人に官位を授けて登用した。

高句麗が滅んだ後、新羅は唐と戦って半島に独立した立場を築く。日本では672年の壬申の乱で政権を取った天武天皇が、半島に対する政策を親新羅政策にきりかえて、遣新羅使と学問僧を派遣した。韓半島の安定とともに、白鳳期の文化が日本でも栄えるのである。695年までに日本は遣新羅使を8回送り、新羅は使節を21回派遣してきた。

そして8世紀の遣新羅使は15回にのぼる。

東宮は王たちが国家的式典を行ったり、外国の使節を迎えたりするために建てられたものだといふ。日本の使節が迎えられたのがこの宮殿だった。美しい樹木や草花が植えられ、池には珍しい鳥や獣を放していたと伝えられる。

この雁鴨池の調査、発掘が行われたのは1974年から76年にかけてのことだった。発掘を担当した慶州古跡発掘調査団の1人、金善泰氏は、当時の様子を次のように語る。

「はじめ池の形だけしかなかった。部分的に土が山のようになっていて、それを掘り出してみたら石垣が出てきた。それで本格的な発掘に入ったのです」

2.2 「地下の正倉院」と

池の南辺と西辺は直線的な護岸石積みとなっている。北岸と東岸は多くの入り江、半島をふくんで複雑な曲線を描き、奇岩奇石が組みこまれていた。そして池の中には大小3つの島がある。池の南側と西側の広い空間には規模の大きな建物がならび、岸辺にも大小5棟の楼(ろう)閣がつくられて、渡り廊下で結ばれていた。現在、池の姿がそっくりよみがえり、岸辺に3つの建物が再現されている。

「池をそっくり再現できたのは、石があったからです。石をそのままにして復元した」と金善泰氏は語る。

この発掘からおびただしい量の文化財が出土した。池の周囲の建物のもと思われる瓦類や、飾り金具、宮殿で使用された土器類、鉄製かぶと、鉄製甲冑(かっちゅう)片、やり、カマ、スプーン、青銅盒、仏像、木印、木簡、木船など1万2千余点。

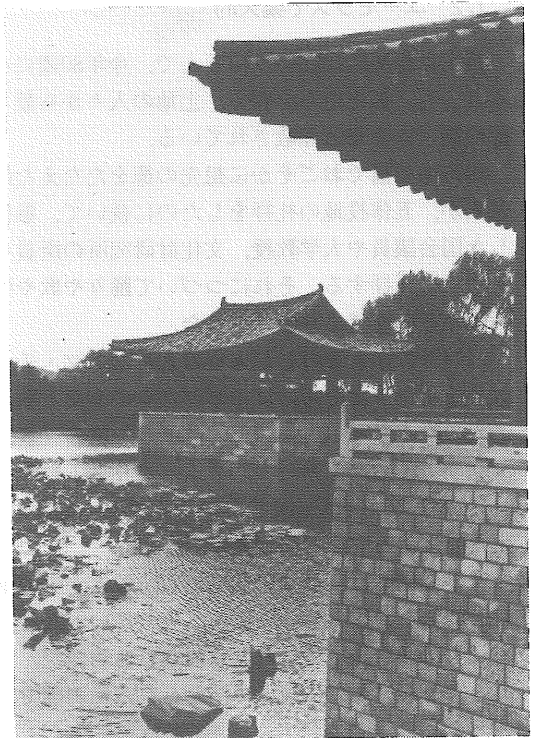
これらの文化財の中には、正倉院に所蔵されている宝物と全く同じ形態のものが少なくなく、「地下の正倉院」と呼ばれるようになった。

奈良時代の漢詩集「懷風藻」には、新羅国からやってきた使節を接待した時の詩がのっている。

勝地山園の宅、秋天風月の時。酒を置きて桂賞を開き、履(くつ)を倒(さかさ)まにして蘭期を逐(お)う。人は是れ鷄林(けいりん)の客、曲(しらべ)は即ち鳳樓の詞。青海千里の外、白雲一(もはら)に相思はむ。(百済公和麻呂作)

新羅からの使節を迎えて、心から歓迎している様子が、さりげない情景描写によって表現されている。

雁鴨池は名勝地とあって、大勢の観光客が訪ねてくる。池の形は神仙思想の表現だと言われ、いつまで見てもあきない味がある。この名所の外は田畑が広がっていて、空気はとびきり澄んでいる。



雁鴨池

3. 皇龍寺の跡

3.1 53年間治めた真平王

天武、持統、文武とつづく白鳳時代に、日本の仏教界は新羅に学ぶことに積極的だった。

しかしそれ以前の時代で、新羅と友好関係を結んだ為政者は、唯一、聖徳太子のみである。韓半島南部にあった日本の足場である任那(みまな)が562年に新羅に滅ぼされて以来、大和朝廷の政策は新羅征伐の方針で一貫し、百済の立場を支持してきたからだ。597年に新羅の真平王が、大和朝廷に仏像を送ってきたが敏達天皇はそっぽを向いた。

聖徳太子の急激な新羅政策の転換は何を物語るのか。

聖徳太子には2人の師があった。高句麗の僧慧慈(えじ)は仏教を教え、百済の博士覺智(かくか)は儒教を教えたといわれる。そして新羅系出身の秦河勝(はたのかわかつ)も側近だった。

冠位十二階の制定、十七条憲法の発布、中国との対等外交など、聖徳太子による中央集権国家形成の諸政策は、韓半島の師たちからの教育なくしてありえなかったろう。そしてまた、彼らを通して太子は東アジアの政情をつぶさに学んでいたとも推察されるのだ。

聖徳太子の親新羅外交への転換は、新羅が隋と手を結んだことに理由があったといわれる。新羅の背後にある隋と戦うことだけはさげなければならぬ、と太子は判断した。太子が外交の主導権をもつ601年から亡くなる622年までの間に、新羅からの使者の来日は6回をかぞえ、百済の使者の来日は1回だった。

新羅の真平王は、秦氏を通して聖徳太子の人柄を知っていたらしい。太子が亡くなった622年の7月に使者が来日し、仏像、金塔、舍利などを送ってきた。太子の死を悼んで真平王がとどけたのである。このとき送られてきた仏像が、京都太秦(うずまさ)広隆寺の半伽思惟像だと言われている。

ところでこの真平王は、新羅を53年間統治した最長期の王で、体が大きく、即位の時に天使から授かった玉帯は実にみやびやかだったという。狩猟が大好きで、即位した当初は国務をそっちのけで猟に時間を費やし、大臣たちを困らせたこともあった。

この王の娘、善徳女王の時の伝説にこんな話がある。後高麗の王、弓裔が新羅を討とうと計画を立てた。ところが、「新羅には3つの宝があってこれを侵してはならない。その3つの宝とは、第1が皇龍寺の丈六尊像、第2がその寺にある九重塔、第3が天賜玉帯である」と天使にいさめられてその計画をとりやめたという。

ところで皇龍寺の発掘調査がはじまったのは1976年で、現在も続けられている。

3.2 常に外敵におびえる

一塔三金堂式の伽藍配置が明らかとなったが、その広さは観光の名所となっている仏国寺の8倍

の大きさで、回廊の内だけで9千坪あるという。今はその礎石が当時をしのばせるだけだ。調査事務所が敷地のわきにあって、そのそばに出土した埴(せん)と瓦が山のように積まれていた。慶州古跡発掘調査団の李鍾聲氏は言う。

「ソウルの文化財管理局の文化財研究所から派遣されて調査しています。雁鴨池(アナプチ)の調査を終えてこちらに移り、皇龍寺の調査もほぼ終わりました。現在調査中なのは慶州の平地部で100カ所、磨崖仏のたくさんある南山で130カ所あります。昔の町は半月城や皇龍寺のあたりに広がっていたらしいのですが、元軍が攻めてきた時に焼かれ、人々は冬の寒い風をさけるために古墳群の間に身を移しました。古墳公園が町の中心にあることから分かるように、今の町は古墳の上につくられたものです。道路をつくった時だけで、300以上の古墳が出てきた」

さて、この皇龍寺に建っていた九層の塔の高さは74メートルもあった伝えられる。丈六尊像と呼ばれた仏像は金と鉄で鑄造したもので、重さ27トンに及んだという。そして大雄殿は間口50メートル、奥行き18メートルの巨大な建物だった。

たえず周囲の好戦的な国からおびやかされ、いかにして国を守護するかという問題は、新羅の王たちの最大の課題だった。皇龍寺は国家守護を祈願して554年に建設がはじまり、真平王の時に完成したものだといわれている。

九重塔には、こんな伝説がある。慈蔵という僧が中国におもむいた時に、護法龍の父だという神人に出会い、「皇龍寺に九層の塔を建てれば隣国が降伏し、朝貢して、王業が長らく太平になるだろう」という啓示を受ける。その話を僧から聞いた善徳女王は、百済の工匠をよんでその九層の塔



皇龍寺の発掘現場

を造らせたという。

文武王のとき、その予言どおりに新羅は三国統一を果たし、王業が長らく太平となる。この安定した政権と並行して、日本にも奈良時代から平安時代の安定期がおとずれ、独自の国風文化を育てていくことになるのである。

4. 新羅の四天王寺

4.1 多くの学問僧が渡る

新羅の仏教に対して最初に目を開いたのは、中国に留学した学問僧たちだったと考えられている。僧旻(みん)、高向玄理(たかむこのくろまる)、南淵請安(みなみぶちのしょうあん)らは、608年(推古16年)に隋に留学し約30年後に唐から帰って来るが、帰国の船は新羅の船だった。唐から新羅に渡り、ある期間慶州に滞在した後日本に送りどけられたらしい。

インドから帰国した玄奘(げんじょう)のもとに、日本からも智通、智達が勉強するために出発したが(658年)、その際に彼らを唐に送り迎えしたのも新羅の船であり、新羅経由のルートだった。

新羅では法興王の時(528年)に仏教を国の指導理念として以来、年とともに信じる人が増え、寺院の建立もさかんとなった。『三国遺事』の表現によると、「新羅のみやこは寺と寺とが星のようにいっぱい建っており、塔と塔とがあたかも雁(がん)の行列のように連なっていた」という。

日本の学問僧たちは、七堂伽藍がたちならび、朝夕には梵(ぼん)鐘の音が流れる様子を目の当たりにしたに違いないのである。新羅の僧の学問研究は熱心で、田村圓澄・九州大学名誉教授の研究によると、549年から670年までの間に中国に赴いた新羅学問僧の渡航数は、15回に及んだという。

今日の慶州で、記録に残る寺院数は69、寺址(し)が残っていたり遺物が現場で発見された寺院は31カ所にのぼる。が、ほかにももっとたくさんあったことはまちがいない。皇龍寺わきで発掘調査中の寺院は、名前が判明していないと、調査員が語っていた。

さて文武天皇にはじまる白鳳時代の40年間は、毎年のように日本の使者、新羅の使者が往復し、学問僧たちもさかんに新羅に行って勉強した。

そういった証拠として学者たちが指摘する材料の1つは、寺院の伽藍配置の比較である。

高句麗から日本に伝えられた伽藍配置は中門、塔、金堂、講堂が南北一直線上に配されるもので、大阪の四天王寺がそれに当たるが、新羅では別の形態を生み出した。金堂の東西に塔を配した双塔式の伽藍配置で、679年に完成した慶州狼山(ろうざん)の四天王寺や、682年に完成した感恩寺に見ることができる。

4.2 唐軍からの防衛願う

帰国した新羅学問僧たちによって天皇は新しい伽藍のスタイルを知った。その形態を取り入れて建てた日本の寺院の代表が、華麗な2つの塔をもつ奈良の薬師寺だ。持統皇后の病氣平癒を祈願して天武天皇が発願建立した寺である。こういった文化の交流の中に、日本の新羅に対する尊敬の念やこまやかな気持ちを読み取る研究者は少なくない。

奈良を見物した韓国人の観光客は、ひとしく昔の故郷に帰ったような気持ちを味わうらしいが、当然のことといえるかもしれない。

韓国慶州の四天王寺はいま幢竿支柱と礎石以外には何も残っていない。ハイウェイのわき野原に、ポツンとその空間が存在するだけである。が、西には南山のおごそかで美しい岩山が遠望され、心を慰める。

四天王寺は、文武王が新羅を強力な唐の軍勢力から防衛するために建てた寺だといわれる。

百済と高句麗が滅んだ後、唐はその矛先を新羅に向けた。文武王が唐を迎え撃つように軍隊に命令すると、唐の皇帝は使者として来ていた王の弟を投獄し、侵攻の準備をすすめた。文武王は、秘



四天王寺跡

法を学んだという僧明朗に助言を求めたところ、狼山の南に四天王寺を建て、その前に軍隊を訓練する練兵場を設置するよう建議した。

唐の軍船が新羅に着いた時、明朗が四天王像を礼拝して秘法を行使すると、突然、台風が巻き起こって唐の軍船はみな海に沈んでしまった。激怒した唐の皇帝は翌年2次遠征軍を送ったが、前と同じように船は沈没してしまったという。

文武王はいま、三国統一を果たした武烈王、金庾信将軍とともに、南山(慶州南部)の東麓(ろく)にある統一殿に祭られている。この統一殿は遺跡というよりも、現代の韓国人が南北統一を祈願する、祈禱と礼拝の殿堂として朴大統領によって建てられたものである。

5. 落葉の芬皇寺

5.1 最高水準の研究

天武、持統、文武朝に新羅に学んだ日本の学問僧は13人をかぞえる。観常、雲観、智隆、明聡、観智、弁通、神叡、行善、義法、義基、惣集、慈定、浄達である。この期間、唐に赴いた僧は道慈、弁正の2人にすぎなかったから、いかに日本の仏教界が熱心に新羅に学び、関心をそそいだかが推察される。

東西に塔を配した奈良・薬師寺の伽藍配置の決定には、685年に新羅から帰国した観常、雲観、あるいは687年に帰国した智隆らが関与していたと想像されるのである。

また持統朝には、新羅の僧、詮吉ら50人が大学日本に帰化と記録されている。

奈良の律令体制を支えたのは護国仏教だったが、その学問研究機関である南部六宗のうち、華嚴宗の開祖、審祥や、法相宗の智鳳、智鸞、智雄は新羅の人だった。

当時の新羅仏教界は、元曉、義湘、義寂、順璟、璟興ら多くの高僧を輩出する。その仏教研究は東アジアの中で最高水準に達していたといわれる。そして彼らの著述した、仏教教典に関する注釈書の多くが、日本にもたらされたのである。

とりわけ元曉(618-686年)と義湘(625-702年)の存在は歴史的にも重要で、中国の宗代に編纂(さん)された『宋高僧伝』にもその生涯が描かれた。

のちの時代、『宋高僧伝』に記された元曉伝、義湘伝を読んで感動し、心から尊敬と憧憬の思いをいだいたのは、鎌倉時代に華嚴宗を再興する、京都高山寺の明恵上人高弁だった。

元曉、義湘に憧憬の念をいだいた明恵上人は、2人の生涯を絵巻物に描いた。元曉絵2巻、義湘絵4巻である。それらは高山寺に保存されていたが、現在は京都国立博物館に寄託されている。

元曉と義湘は、どんな人物だったのだろうか。東京大学東洋文化研究所の鎌田茂雄教授はこんなふうに紹介する。

「明恵上人は『宋高僧伝』を読んで、元曉と義湘が自分の分身のように感じたのだらうと思います。明恵は華嚴宗を再興するのに、中国仏教ではなく、元曉や義湘を祖師と考えた。それだけ2人に信仰をもっていたのだと思う」

「元曉と義湘の学問の傾向や性格は違っていました。元曉は世界的な思想家です。行動と思想のスケールが大きい。戒律を破りながらそれを超えている。中国へは行かなかったけれども、みごとに中国の教学を統一し、しかも元曉が生み出した独創的な思想を中国仏教が取り入れている。それはすごいことです。この時代、新羅の僧たちは自由に中国に行っているし、中国人に同化してしまった僧もいる。義湘も中国に行って華嚴を学んだ1人です。義湘の果たした役割は、三国統一という、国家仏教形成のうえで重要です。義湘は、長安、慶州、奈良を結ぶアジアの大きな線の中で意味をもって来る。奈良仏教を理解し、東大寺の建立を考える上でも無視できない人物です」

5.2 どくろのたまり水

元曉と義湘の2人はまだ若い日、玄奘に学ぶために遊学の途についた。東海岸に行き船便を持つことにしたが、途中で長雨にあい、ある夜、宿がみつからず、塚の間で野宿をした。その夜半、元曉は渴きを覚えて目をさまし、手にふれた器の中の水を飲んだ。翌朝それをみると、昨夜飲んだ水が髑髏(どくろ)のたまり水であることを知って急に吐き気をもよおしたという。その時元曉は、何も知らずにいて飲めた水が髑髏の水と知って飲めなくなるのは、一切が心の持ち方によって生じるからだと悟った。

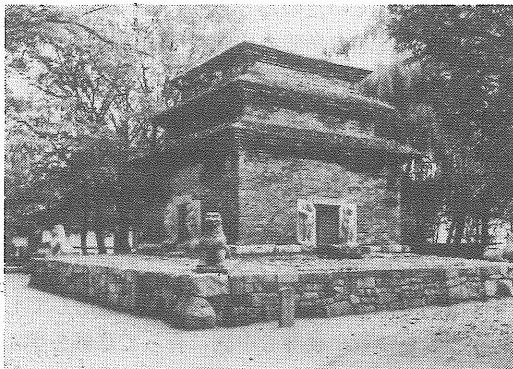
元曉は入唐を放棄し、義湘はのちにひとり入唐

を果たす。

元暁がのちに著述に没頭したという寺が慶州に残っている。皇龍寺のとなりにある芬皇寺で、今は石塔しか残っていない。が、この石塔は慶州にある塔の中で一番古いものだという。石材を磚(せん)の形に切り出して積み上げて建てたもので、現在三層までが残っているが、もともとは七重、あるいは九重の塔だったと推量されている。

1915年、第二層と第三層の間から石函(かん)が見つかり、中から銀の盒(さら)、玉、はさみ、銀の針筒、金の針、糸巻などが出てきた。創建者の善徳女王のものと想像されている。

芬皇寺の境内には売店があって、読経のテープを流していた。落ち葉は、掃いても掃いても積もってくる。



元暁が著述に没頭した芬皇寺にある石塔

6. 東洋の美德 犠牲精神

6.1 戒律を破って結婚

明恵上人が華嚴宗の祖師として慕い、『華嚴宗祖師絵伝』に描いた新羅の元暁(ウォンヒョ)と義湘。

元暁研究の第一人者、東国大学の李箕永(イ・ギヨン)教授は、「明恵上人は元暁の直弟子みたいな人ですね」という。

「天台宗の管長をしておられる葉上照澄さんに案内されて、上人ゆかりの桐尾(とがのお)高山寺に行ったことがあります。場所をそこに選んでくれた。たいへん印象的でした。何か新羅的なものが残っている気配がした。元暁は少しずつ世界に知られはじめましたが、ああいう偉い人が世界に知られずにいたということは、後裔(えい)として

情けない子孫だという気がします。葉上さんのような方が、元暁を勉強なさればいいのと思った」

元暁は、人間とその世界の根源を明らかにすることを、自分の思想的探求の目標とした、と李箕永氏は述べる。悪と無知の状況の中に、光明をもたらすものは何か。李箕永氏は『元暁の思想』の中でこう記す。

＜その光明、その夜明け、太陽はどこから来て、どこにあるのか？ 元暁はそれをわれわれ各自の心のもっとも根源的で、元初的な所に見出した。すべての人間は自分ではわからないが、何もない虚空に、あらゆる宝物の価値をも創造し尽くす無窮の力をもつような心、深い正しい心、慈悲深い心をもともと持っている、という悟りであった＞

元暁は仏教全体を広く理解する基準を設定し、仏教を民衆のものとする実践活動を行った。何より自在奔放の人だったという。山水に座禅していたかと思えば民衆の中に入って歌を歌い、踊りを踊り、驚くような説教をし、戒律を破って結婚をした。戒律をこえる何かを彼はつかんでいたのだ。

東大寺大仏建立に力を尽くした僧の行基は、民間伝道者として、あるいは土木事業の先駆者として知られているが、彼の行動が弾圧されずにむしろ称賛されたのは、当時仏教教団の監督にあっていた僧正や僧都、律師たちが新羅に留学して、そこで崇敬されている元暁の姿を見ていたからだともいわれる。

6.2 日本には弟橘媛物語

ところで明恵上人が描いた義湘絵4巻のうち、2つの場面が『原色国宝』(毎日新聞社)にも収録されている。義湘は入唐の旅の途上、山東半島の登州という所で、ある仏教信者の家に滞在した。主人はその人柄に感銘をうけ、少女の善妙は思慕をよせた。が、義湘の道心は堅い。絵の1枚は、彼が善妙に会って言葉をかわしている場面だ。

義湘は長安南方の終南山で華嚴を智儼(ちごん)に学び、10年後に帰国の途につく。登州を出発した義湘の船を、善妙は守りたいと念じて海中に身を投げると、竜となり、船底について無事新羅まで送りとどけたという。2枚目の絵は、船を竜が守護している図だ。

この話は、善妙伝説と呼ばれているものだが、善湘が帰国して開いた道場である慶尚北道栄州郡

の浮石寺には、今も善妙像を安置した善妙閣がある。

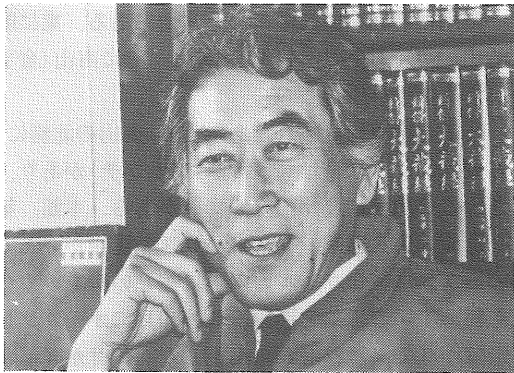
日本武尊が東国に遠征した時、海難にあい、それを救うために、身を投じた弟橘媛(おとたちばなひめ)の物語が日本にもある。こういった女性像は、東洋人にとって永遠の理想の存在なのかもしれない。

明恵上人は、この善妙伝説に深い感銘を覚えた。

承久の乱(1221年)の時に、宮方に加わって処刑された貴族の未亡人の中には尼(あま)となって明恵のもとに集まるものがいた。彼女たちは高山寺に近い平岡に尼寺を建てて住んだが、この寺は善妙寺と名付けられ善妙像が安置された。明恵は、「不犯の聖(ひじり)」とたたえられた名僧である。

いま日本の仏教史も、韓国の仏教史も、互いを知らなければよく理解できないところに、研究者たちは立っている。日本を何度か訪れている李箕永教授は、こう語る。

「飛鳥時代や奈良時代の日本の仏像は、韓国のものとそっくりです。が、新羅が減び高麗時代になると、まったく表情が互いに異なってくる。飛鳥の寺に行って、私は無意識に韓国式の五体投地の礼をしました。それを住職さんが珍しそうに見ていて、五体投地というんですか、と尋ねてきた。日本ではこういう礼拝をしないのですね。歴史の中で礼拝のしかたもそれぞれ変わっていった。知恩院に1週間いたことがありました。坊さんたち



日韓の仏教について語る東国大学の李箕永教授と木魚をたたきましたが、はじめはできませんでしたね。日本は仏教に鍛えられて発展してきたと思いますよ。国民の従順さ、正直さは、仏教が鍛えたものだと思います」

7.1 韓半島の独自性みる

日本と韓国の歴史が、文化交流の観点から研究されるようになったのは戦後のことである。1965年に日韓条約が締結されて往来が自由になり、日韓の学者、僧侶、文化人の交流がうまれるようになった。その結果、歴史が大きく書き換えられるようになったのである。

そうした仕事をしてきた学者の1人、鎌田茂雄東大教授は、はじめて韓国を訪れた時のことをこんなふうに語る。

「偶然17年前に韓国に行き、寺院を見ました。寺院空間の建物の配置、色彩がまったく中国のものとも、日本のものとも違う。韓国仏教は、従来中国の亜流と考えられていた。ところが、そこに独自の仏教文化が発達したと気がついて、研究しなければならない課題だと知ったのです。韓半島の独自性を知るとは、中国の独自性、日本の独自性を知ることでもある」

その翌々年から鎌田教授の寺院めぐりが始まった。

当時鎌田教授が訪れた慶州の仏国寺は、紫霞門(しいかもん)の前の青雲橋、白雲橋が崩れかかっており、荒れ果てた寺だったという。

「しかしそれでも、風情がありました」

日本の統治時代、晩秋初冬に、このさびれた、しかし素朴で高貴な気配をただよわせている仏国寺に、1人訪れた詩人がいる。この詩人、三好達治はそこで一編の詩「冬の日」をつくり、戦後再び訪れて「百たびののち」という詩をつくった。

ああ智慧は かかる静かな冬の日に それはふと思ひがけない時に来る

人影の絶えた境に 山林に たとへばかかる精舎の庭に来て

前触れもなくそれが汝の前に来て かかる時ささやく言葉に信をおけ

「静かな眼 平和な心 その外に何の宝が世にあらう」

(「冬の日」から)

樹木は裸となり、頭上の空は晴れきって、遠い吐含山の山脈が波うって見える。風雨にさらされた紫霞門の前で詩人は、人生の哲理を悟ったのである。

7. 仏国寺の世界

7.2 秀吉の征伐時に消失

生前の三好達治に「文章会」で指導を受けた俳人の文挾(ふばさみ)夫佐恵さんは、師の心を訪ねて仏国寺に旅し、こんな俳句をつくった。

栗鼠かくれ木の葉しぐれの仏国寺
消えがての空の渚や秋の蝶

仏国寺は華麗で勇壮な寺院である。11月に入って紅葉がひとさわ美しくなる。

この寺院は法興王の母、迎帝夫人の発願によって創建され(535年)、その後、景德王の時(742-764年)に宰相、金大城の発願で重建された。

青雲橋、白雲橋から紫霞門につづくファサード(建物の正面)は、下界と上界とを分けて、天上世界の王城のようである。仏国寺というその名が象徴するように、ここの寺院の僧侶の中には、金銅で毘盧遮那仏と阿弥陀仏を造成した韋難陀和尚のように天界に靈通する人がいたという。

秀吉の朝鮮征伐の時に兵火で2千余間の大伽藍が消失し、現在の規模はその時の10分の1である。1970年朴大統領の発願で再建、修復工事が行われ、74年に完成した。

大雄殿、無説殿、観音殿、毘盧殿、地藏殿と境内の中を案内してくれたのは、若い坊さんだった。呑空(どんくう)という法名をもち、僧になって14年、今年32歳になるという。

仏国寺の背後の山間に、仏国禅院という、曹溪宗の修行道場があって、そこでこの青年僧は6年間、座禅の修行をした。

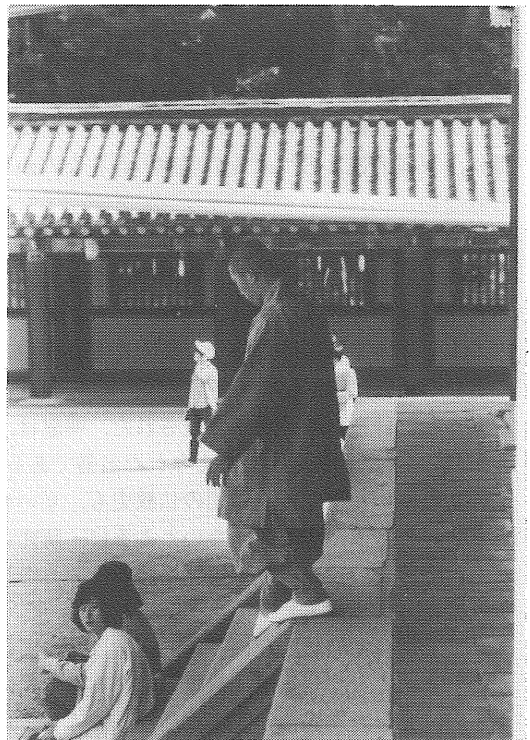
「一度ここに入ると、かぎをかけてしまう。出たら、地獄に落ちると言われました。修行期間中は横になりません。座ったまま1時間ぐらい眠るだけです。今、3カ月期間の修行を、38人の坊さんたちがやっています」

「悟道者不入」と門にかかげられた禅院を外からのぞいたら、若い坊さんが窓から首だけ見せて、じっとしていた。

昼食を庫裡(くり)でごちそうになったが、庶民と同じキムチがおかずだった。「大きな体格をしていて、これだけだとおなかがすきませんか」と尋ねると、「とてもすきます」と笑って答えた。

呑空師は今、東国大学大学院で学んでいるが、高校時代からはじめた武道は、柔道その他合わせて二十段になるという。モントリオール・オリン

ピックの候補選手だった。



旅行者や信者でにぎわう仏国寺

8. 独特の新羅仏教

8.1 仏教伝来が遅れる

慶州は周囲を山に囲まれた盆地にある。東に明活山、西に仙桃山、北に金銅山、南に南山(金鰲=きんごう=山)がある。

市街を南東にはずれたあたりの、南山の北側に、月城があり、東宮址(雁鴨池=アナプチ)があり、さらにその南に慶州国立博物館がある。本館、第1別館、第2別館、レストハウスの建物が並んでいるが、単純なフォルムの中に美しい線をいくつも秘めている。第2別館はこの10月にオープンしたばかりで、雁鴨池から出土した文化財が展示されていた。

慶州博物館の鄭良謨(チュン・ヤンモ)館長は、新羅の文化を概括してこう言う。

「半島の東南部にあった新羅は、中国の先進文化を受け入れるのに、たいへん不便な地にありました。仏教が入ってきたのも高句麗、百済を通してであり、いちばん遅れて入ってきた。それだけ

にまた、保守的で世襲的な立場を守るということを知っていました。だから、地下から発掘されるのは、仏教文化以前のものが多いのです」

高句麗の仏教伝来は小獸林王の時で、372年。百済の仏教伝来は沈流王の時で、385年。新羅に仏教が入ってくるのは5世紀の前半とされるが、公認されたのは法興王の15年、528年であった。

「仏教公認以後、新羅はそれをもって国の精神とし、三国の統一を果たしました。その仏教というのは護国仏教ですが、もともと韓国人がもっていた精神である、シャーマニズムや、青年の教育機関だった花郎道（ファランドー）とひとつになったものです。そういう独特の仏教が統一新羅の根幹になった」。

日本、中国、韓国の寺院をたんねんに見てきた鎌田茂雄東大教授は、「東アジア仏教圏の共通性は、漢訳大蔵経をテキストに使ったことです。そして相違性は教理の相違、実践の相違、寺院の伽藍配置の相違をあげることができます」と指摘する。

白鳳時代に新羅に留学した日本の学問僧たちは、新羅によってあらたに創造された仏教に出合った、と言うことができるだろう。

この当時のことを記した、高麗時代の僧、一然の『三国遺事』を読むと、シャーマニズムの気配を感じるのには筆者だけではないと思う。序文でこう記す。

＜むかしの聖人は礼楽で邦をおこし、仁義で教えたが、怪力乱神を語らなかった。しかし帝王がまさしく起こる時には、天命や瑞兆の知らせを受け、凡人とは異なるところがある。その後に变革に乗り、大器を執り、大業を成し遂げたのである＞

天帝、天神、帝釈天、釈迦、文殊菩薩、弥勒菩薩、護国竜、山神、神人、などなどが人間界におりてきて、仏国土の建設に協力する、という説話にこの歴史書は満ちている。

8.2 石清水八幡宮の神に

青年たちの花郎集団は、国家に枢要な人物を養成するための訓練機関だった。歌舞遊戯の社交の場であるとともに、弥勒信仰にもとづいて呪（じゅ）術を行い、心身を鍛錬し、山野を跋（ばっ）渉した。

新羅上期の僧に、儒学を学び、のちに中国に留

学して仏教を学んだ円光という人がいる。600年に新羅に帰国し、君臣に經典を講じ、その名声は天下を風靡（び）した。友人の2人が、一言で終身の戒を教えたまえと請うと、彼らに「世俗五戒」を示した。

＜君に事（つか）ふるに忠を以てす＞＜親に事ふるに孝を以てす＞＜友に交はるに信を以てす＞＜戦いに臨みて退くこと無し＞＜殺生に忤（えら）むあり＞

ここで興味深いのは、仏教の不殺生戒にもかかわらず、新羅仏教はあえて、一度戦争に臨んだら敵陣に背を向けてはならぬ、と説いたのである。

軍事的対抗力で新羅は高句麗に劣っていた。花郎道の、信義を重んじ、正義のためには死をいとわなかった気風が、三国統一の原動力となったのである。

日本の武士道は、源氏にはじまる。「天下第一武勇之士」と評された源八幡太郎義家は、石清水八幡宮で元服した。石清水八幡宮の神は、源流をたどると、新羅の渡来人の神である。

鄭良謨氏はつづける。

「南山には三国時代末から統一新羅時代にかけての遺跡がたくさんあり、山それ自体が仏国のようなものです。36の谷があり、それら谷々の風景のいいところに塔や寺址や磨崖仏がある。300以上の遺跡があります」

花郎の青年たちもこの山中で修行したと想像されている。



国立慶州博物館

9. 南山に登る

9.1 東アジア唯一の存在

慶州博物館の庭園にはおびただしい数の石仏が並べられている。これらの石仏の大部分は、慶州南方にある南山から出土したものだという。

南山は南北に長い山で、東の斜面、西の斜面から、谷が尾根すじに向かって36本刻まれている。この36の谷に、現在のところ、石仏79、石塔62、寺址(し)106が教えられている。南北8キロ、東西3キロの小さな岩山に、これほどおびただしい仏教遺跡が存在するのは、東アジアでも唯一の存在だ。

『三国遺事』にこんな説話がのっている。

景德王の8年(749年)に徳望寺という寺で塔が完成した。落成会の場にこじき僧が来て、参席させてほしいと王に願うと、末席に座らせてくれた。供養が終わって、王は僧にすまいを聞き「帰ってから、王みずから行った祝典に参加させてもらった、などと言うな」というと、僧は「陛下も釈迦に会ったと他人に言ってはならない」と答え、王は驚いて礼拝しようとする。僧は去ってしまった。家来に追わせると、南山の谷まで来て、岩の上に錫杖(しゃくじょう)と鉢を置いて姿を消したという。

慶州博物館の鄭良謨(チュン・ヤンモ)館長は、韓国人の自然観についてこう言う。

「韓国美術の特徴は自然との関係です。自然の中にとけこんだ形で人のつくり出した美が存在している。新羅の人は仏を自然に求めた。仏は自然と一体だという意識があった。南山にはたくさんの仏が彫られている。岩が仏であり、山が仏であり、つまり仏国なのです」

イスラエル民族も神を岩にたとえて表現してきた。モーセの十戒は岩に刻まれたものであり、詩篇では「主はわが岩」とたたえ、黙示録ではキリストを「白い岩」と象徴した。モーセの十戒と仏教の菩薩戒とで多くの条項の内容が同じなのにも驚かされる。

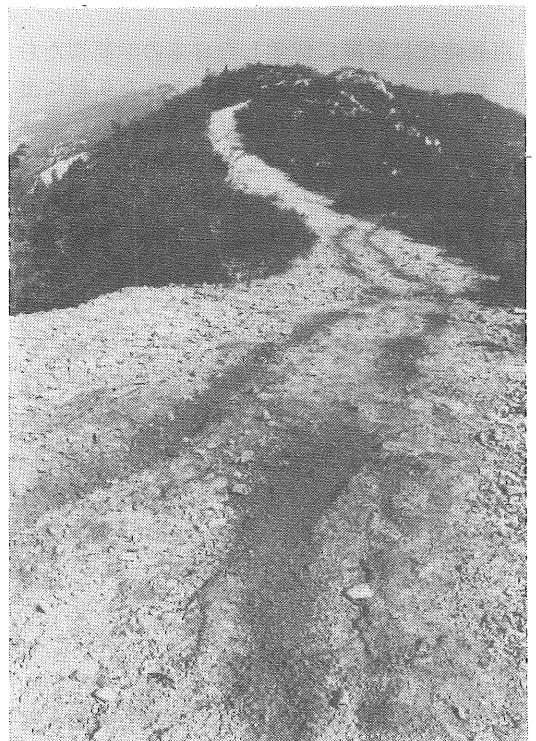
9.2 固有文化の解明に

ところで記者たちは、南山の尾根につくられた

「南山周遊道路」を車で走ってみた。山の北西麓(ろく)にある鮑石(ほうせき)亭から入って尾根を南にたどり、頂上をこえ、東南麓の南山里に抜けるこの道路は、1966年に造られたものだ。が、ほとんど使われることがないらしく、「私もこの道は、実は、運転の腕がビビる」とタクシーの運転手がいほどの悪路。しかも、夏の樹木の繁茂で、車も向こう側へ通り抜けることができなかった。

しかし468メートルの頂上の眺望はすばらしく、東の谷々、西の谷々の露出した白い、あるいは褐色の岩肌は、秋の日に照らされて、心をひきつけてやまない美しさをもっていた。荘厳、厳肅、酷烈で、慈悲の生命を感じさせる。

頂上の北側、東側に下ったところに「想思岩」というのがあった。シャーマンや僧侶たちが祈禱(とう)をささげ、瞑(めい)想にふけた岩だという。岩の割れ目、組み合わせが雨風から人を保護する形になっている。が、眼下は断崖(がい)であり、大きな空と、遠くの尾根と谷とが目に入って



南山の頂上をつらぬく「南山周遊道路」

くるだけだ。彼らはここで何を祈ったのだろうか。

そんなことを考えていたら、松茸(たけ)とりの男たちが登ってきては通りすぎて行き、しばらく

して、スポーツウェアの胸に「滅共」のワッペンをつけた高校生の集団が、ぞろぞろとやってきた。

「滅共」とは、共産主義撲滅の意である。

この南山に50数回登り、遺跡の1つ1つをたねんに調べて写真におさめた日本の美術史家がいる。東国大学の講師をしていたという、小田原市に住む正木晃氏である。

「今の学会では、古代の対馬海峡を地中海と考えて、半島南部と北九州に連合政権があったのではないかとさえ考えられています。ところがあつた時代になると、両国にナショナリティーがはつきりと表れてくる。日本の平安の国風文化です。半島には半島の固有の文化が現れてくる。それはなぜなのか。南山はそれを解くカギになります。東アジアでこれほど仏教遺跡が集中しているのはここだけです。しかも千年間にわたって彫りつけられ、守りつけられた」

「地図を見ると、新羅は今の北朝鮮の方まで統一したにもかかわらず、首都は南の端の方にあつた。地理的にはソウルとか平壤においた方が有利だったのではないかと考えられる。新羅が生まれたのは南山北西麓の蘿井(ナジョン)。滅んだのも同じ北西麓の鮑石亭です。景哀王の時(927年)、後百済の將軍に急襲を受け、月城に逃亡中につかまって王は殺された。最後まで新羅は南山にこだわり続けた」

10. 再び南山へ

10.1 太陽信仰と関係か

「慶州南山の高さは468メートルです。奈良の三輪山と1メートルしか違わない。三輪山は467メートルです。東アジアで、神が宿った山は共通している点があるのではないかと思います。ヒマラヤのようにあまり高いと、魔が住んでおり、力が強すぎて人が近づけない。人間が天上世界と交流できた場合は、自然条件がある程度限られていたと思う。南山の頂上に磐座(いわくら=神の鎮座する山中の大岩)がある。三輪山にもある。おそらくそこは神おろしの場所だった」

2年間、南山の遺跡を研究してきた正木晃氏(元東国大学講師)はつづける。

「南山の茸長(ようちょう)谷にあるのがすごい。

石仏、石塔が南北一直線上に並び、その延長線上に磐座がくる。春分、秋分の日には真南に太陽がくる。太陽信仰とも関係していたのではないかと」

「南山には、日本と韓国とで、同じ部分と異なる部分とがみられる。三輪山は、南山と違って仏教化されずに神道的なものとして残った。日本にも奈良市頭塔の四面仏とか、滋賀・金勝山狛坂寺の磨崖三尊仏などの石仏があるが、しかし山ぜんとたいに石仏が彫られ、塔がつくられ、庵(いおり)のような寺が建てられた、というのではない」

記者たちは日の出とともに宿を出発し、南山西部にある谷の1つ、三陵谷を登ってみた。谷の出合いの松林に、3つの王陵が祭られていることからこの谷の名前がある。

岩の上をすべて流れる谷の水を眺めたり、雑木林をくぐったりしていくと、首のない、石仏坐像があつた。そしてその斜面の上には、7~8メートルの高さの磨崖観音立像がある。この観音立像の身体は、背や足の部分が背後の岩にとけこんで、岩がすなわち仏だという感性と思想がよく理解できる。それぞれの石仏の前にろうそくの火がともされていて、上流の方からは、陽気なリズムを刻む木魚の音が聞こえてきた。

さらに登ったところに、高さ5~6メートルの岩の壁面に、阿弥陀三尊仏が2組、線で描かれていた。その前で僧衣の夫人が礼拝をささげていた。仏たちの線の表情はしなやかで、優美で、東大寺二月堂の本尊光背に描かれた、美しい天女たちの表情に似ている。

10.2 日本の石仏に影響

山道を歩きはじめて1時間余、急斜面を登って上禅庵という寺にたどりついた。オンドル部屋をもつ小さな建物が2棟。寺の柱は7色の彩りで装飾されている。他方の小屋は、ここに下界から祈禱(きとう)に来る夫人の信者たちの宿として使われていた。

さらに登ると山の稜(りょう)線直下の岩壁に、10メートルくらいのみごとな釈迦如来坐像があつた。頭部は丸彫りで、下部は線刻である。遠くには西の平野部を見おろすことができる。

稜線にたどり着くと、大きな谷をへだてた東のむこうに、数日前にたどった「南山周遊道路」の尾根があつた。

「登りきったところにあるのが磐座なんです。表示されているわけではないから、教えられないと分からないのですが…」

正木晃氏は、自説を展開する。

「南山が日本の石仏に影響を与えたことは否定できない。九州国東の石仏もそうだし、東大寺頭塔の石仏など、顔の形がよく似ている。韓国の学者は、古代において韓国は日本に一方的に影響を与えた、とよく言います。それは確かです。しかしそれだけじゃなくて、韓半島も日本も、今のようにナショナリティーが分化しない時代があったのだということ、日本と韓国とをいっしょにくることでできる時代があったのだと、私は言いたいのです」

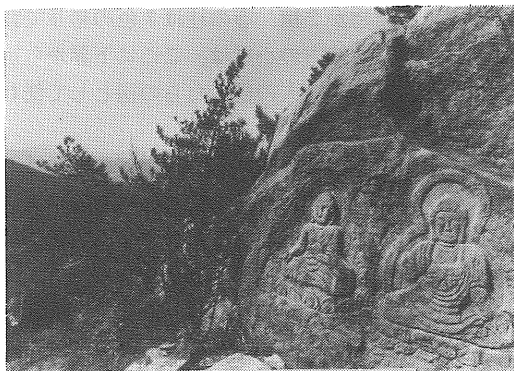
正木氏によれば、南山の石仏は三国時代末期から始まって高麗時代まで彫られつづけたという。石仏の種類と表情は、多種、多様、多彩、無秩序、混とん。新羅が減びても、南山は仏教の中心地として栄え、彫られつづけたらしい。

美術史上、日韓の違いが決定的な形をもって表れてくるのは鎌倉時代である。鎌倉期のリアリズムと、高麗期の土俗的抽象的表現。そういう比較は、ナショナリティー形成を理解する材料となる。

「日本の仏教は密教が支配的になります。密教は、平安期に中国からもたらされたものです。それは普通考えられているよりはるかに強大だった。源氏物語や枕草子の世界がそうだし、戦争のときは武士たちが加持祈禱をした。密教がなくなるとき、近世を迎える。韓国では密教は発展しなかった」

日本の密教とは何か？ 正木氏は、一言で答えた。

「玉体加持、をしたことです。天皇のおから



おびただしく彫られた南山磨崖仏の一つ

だを、国家と考え、祈禱した。それによって国家の安全をはかろうとした。毎年正月になると、真言院で大日経、金剛経をつかって玉体加持をしました。国家そのものをそのようにして宗教レベルで支えたのです。これは明治初年までつづいた。しかし韓国の仏教は、国家をそのようにとりこむ形では発展はしなかった」

11. 弥勒菩薩の美

11.1 王者の雰囲気漂う

吐含山(とがんざん)石窟庵は、仏国寺と並んで観光客に最も人気のある名所だ。

日の出の時刻になると、人々は列をなしてやってくる。山の頂き近くにあるので、東に日本海を眺めることができ、ご来迎の時に参拝するのが最高とされているからだ。そして日中もひっきりなしに人はやってくる。

建物で保護された石窟の中には、高さ5メートルの石で造られた釈迦如来坐像が安置されている。それは、慶州博物館の鄭良謨(チュン・ヤンモ)館長などが、「100回、200回見てもまだ見足りない。一生見つけても見あきない美しさがある」と言うほど魅力ある仏像だ。

人々が大勢押しかけてきても、山中は清浄であり、高貴な空間を保持している。

ところでこの石窟庵に哲学者の梅原猛氏が訪れたとき、その案内をしたのは東国大学の李箕永(イ・ギヨン)教授だった。その時の感想を、李教授はこう言う。

「梅原さんは石窟庵の中に入って仏像をしばらく見ると、第一声にこう言いました。『王様ですね!』それはたいへん鋭い見方だと思って感心した。たしかにその時の国王の理想を表現したものです」

釈迦如来坐像は威厳があり、高貴で、そして健康的で、右ひざの上においたさりげない手の配置などには、自由で平和な気配がある。周囲の壁面には四天王や、仁王や、八部衆や、羅漢などあらゆる弟子が従い、王者の雰囲気を感じさせる。

石窟庵は8世紀中葉、宰相金大城によって造られたものだが、一千年の間忘れ去られ、1909年、偶然に、吐含山の峠を越えてきた郵便配達人に

よって発見されたという。

ところで釈迦如来坐像が、国王の理想像として表現されたとすれば、国を担っていく、若い青年貴族、花郎(ファラン)たちの理想であり守護神とされたのは、弥勒菩薩だった。菩薩は釈迦の青年の時の姿だ。

弥勒菩薩は片足をひざにあげほおづえをついて思索している姿で表現され、半伽思惟像と呼ばれている。わが国にも、斑鳩(いかるが)の中宮寺、太秦(うずまさ)の広隆寺、大阪の四天王寺に安置されている。いずれも古代に韓国から送られてきたものだ。赤松の木でつくられた広隆寺の弥勒菩薩と、金銅でつくられたソウル国立中央博物館にある弥勒菩薩とは、双子の兄弟のようによく似ているので有名である。

新羅の青年貴族たちは、弥勒菩薩にどんな理想をたくしたのだろうか。蓮弁(れんべん)に足をおき、地上界をしっかりと踏んだ一方の足。天上界に瞑(めい)想して動かないひざの上の足。動中静、静中動。静かなポーズの中に、過去と未来の行動を暗示している。

11.2 死んで菩薩の元に

李箕永教授は、花郎集団の弥勒信仰についてこう解説する。

「花郎というのは1人、2人の特定の人物ではなく、無名の青年の集まりでした。弥勒菩薩はその守護であり理想だった。それは華嚴思想から来たものです。華嚴経の中に、善財童子という人が出てくる。立派な心を宝として持っているいろいろな人に会って、いかに生きるべきかを教わりながら一生をすごした。そして最後に会ったのが弥勒菩薩だった。弥勒菩薩は童子が来るのを待っていて、童子が来た時に右腕を動かすと、そこに新しい世界が現れた、と記されている」

弥勒菩薩は第2の釈迦といわれ、人間世界に下生(げしょう)して救いにもれた衆生(しゅじょう)を救いとする使命をもっている、と言われている。

「花郎は、岩や太陽を拝み、山や谷に遊んだ。心身を鍛錬し、文武を兼備した。彼らの修行の目的は何か。それは生きている間に、衆生に益をなすことでした。そのためにはいつ死んでもいい。その時、弥勒菩薩のもとに行く。すなわちそこが仏国土です。『三国遺事』に、新羅の最初の殉教者、

異次頓の物語が出てくる。その話は事実なのか、それとも作者の創作なのか、分らない。しかし花郎の精神と一致する。首を切られても、異次頓は、自分が死ぬんだとは考えなかった。永遠に生きると考えた」

聖徳太子は、日本で最初の菩薩とされた人物である。九州歴史資料館の田村圓澄館長は、著書『古代朝鮮仏教と日本仏教』の中で、「聖徳太子」信仰の骨格は、花郎の弥勒信仰によって準備されたものだった、という事実を論証した。



吐含山の山頂近くにある石窟庵

12. 運命共同体の意識

12.1 金庾信將軍を尊敬

慶州市の北のはずれにある隍城(ファンソン)公園に、金庾信(キム・ユシン)將軍の銅像がたっている。金庾信將軍は、武烈王、文武王に仕えて、三国統一の大事業を果たした武将だ。銅像は樹木におおわれた小さな丘の上にある。馬にまたがり、剣をふりかざした勇壮な將軍の姿は、遠くからも見ることができ、夕暮れ時など、夕陽をあびて、丘の上をいま走っているようにさえ感じられる。

3人、4人と観光客が見物に来る。観光客たちは像をめぐりながらじっとりと眺め、將軍の業績をたたえた碑文を読んだあと、こんどは像の正面に行って、両手を合わせ深々と三礼した。

偶然に出くわした場面だが、古代の將軍が現在の韓国民の間で熱い尊敬の念で迎えられているのを目の当たりにして、祖先との精神的結びつきの強さに感心させられた。

慶州南山の東麓に統一殿という、壮大な霊廟がある。山のゆるやかな斜面を利用して建てられ、

興国門、誓願門と、くぐるごとに、高みに登っていく。興国門の前庭には「三国統一殉国無名勇士碑」があり、誓願門の前庭には「三国統一記念碑」がある。そしてその奥の本殿には文武大王を中心にして、右に金庾信、左に武烈王の肖像がかかげられて祭られている。その周囲の回廊には、三国統一の過程のさまざまな戦争や事件、凱(がい)旋の場面を描いた油絵がかけてあった。

金庾信將軍は、新羅の花郎道(ファランドー)が生んだ英雄の1人である。

百済の興亡戦、白村江の戦い(663年)の時、文武王と金庾信將軍は唐と結んで百済と日本の連合軍をやっつけて敗退させた。中大兄皇子は敗戦の結果、唐の水軍の襲来を恐れて、国土防衛に力を入れ、筑紫大宰に山城を築かせることになる。

12.2 金春秋、日本と唐へ

武烈王は若い時、名を金春秋といった。中大兄皇子が政権をとって間もない647年に来日したことが日本書紀に記録されている。百済を征服するために、協力を乞(こ)いに来たのではないかと推測されているのである。その後彼は唐へ行き、太宗と会見して百済、高句麗征討のための同盟を結成する。

この三国統一は歴史的にどう評価されているのだろうか。失ったものは少なくない。遼東半島から吉林、豆満江下流にわたる広大な高句麗の領土が、韓国史の領域から消えていったこと。その住民が唐に強制連行され、あるいは周辺種族と融合して消えていったこと。

くにもかかわらず、この統一が高く評価される理由は、新羅を主軸に、百済の遺民と韓半島内の高句麗民が、わが国史上初めて唐を共同の敵として、民族的な損失を防ぐため、運命共同体的な意識をともに抱いて戦った、という点からである。

と、東国大学李龍範(イ・ヨンボム)教授は『三国統一の文化史的意識』で記している。

この時、血縁、文化、言語の共通意識よりも、運命共同体としての意識がここに生まれたのである。百済、高句麗の遺民は、新羅王に忠誠を誓う軍団となって、唐の勢力を半島から一掃した。

統一殿の入り口には、「第7回特別統一誓願祈禱期間」の幕が張られていた。南北統一を祈禱(とう)する特別な場となっているのである。

慶州の観光開発は、朴大統領によって強力に押し進められ、現在も続いている。それは単なる開発事業というよりも、韓国の背景にある新羅精神の高揚という意味が強いかもしれない。

東国大学の李箕永(イ・ギヨン)教授はこう言う。

「朴大統領の生まれは慶州のある慶尚北道です。金日成(首相)は高句麗精神を語る。朴政権は新羅精神から生まれてきた。花郎の哲学があったと思う。統一殿を造ったのもそういう関係です。韓国の場合、政治家にクリスチャンが多い。そのキリスト教は非常にドグマティックである。朴大統領が悩んだのはそういう人たちに囲まれていたこと



金庾信將軍像

です。立派なアドバイザーがいなかったかもしれない」

13. 靈妙なる多宝塔

13.1 日本人に圧倒的人気

韓国のはこる最高の芸術品の1つが、仏国寺にある。そしてこれは、観光ポスターなどによって世界中に知られているものだ。すなわち多宝塔で

ある。

多宝塔は、大雄殿と紫霞門の間の、回廊で囲まれた空間に、釈迦塔と対になって建っている。高さが10.4メートル、周囲が7メートル四方。純白、良質の花崗岩で造られている。

複雑な形態をしているが、荘重にして華麗、落ち着いた品位の中に繊細さ、ふくよかさ、靈妙な感じを漂わせている。

大勢の美術家から、意匠が秀でている点、神技といわざるをえない、とたたえられ、類例のない奇想天外な石塔だ、と推賞されている。

多宝塔は多宝如来に由来する。多宝如来は釈迦牟尼が現れる以前、真理が説かれた時にそれを証明することを誓った菩薩で、釈迦が説法した時に降臨し、その教えの真実を証明した、という。釈迦塔と多宝塔が並んで建てられているのは、その状況を表現したものである。

この多宝塔は日本人の間で圧倒的に人気があって、そのミニチュアを家宝とする家庭もある。某旅行会社の話によると、この多宝塔を見るための観光ツアーには、毎回300人が参加しているという。

琵琶湖畔にある日蓮宗妙法山正音寺の住職、村岡練素師は、民心の浄化、世界の平和、日韓の友好親善を誓願して、天の橋立を望む境内に、総工費1億5千万円余をかけて、実物とまったく同一の多宝塔を建てた。落慶法要が行われた昭和59年の釈尊降誕の日(4月8日)には、林田悠紀夫京都府知事、金月樓仏国寺住持、尹榮燁韓国総領事、金山政英元駐韓大使らが祝いにかけつけ、全国から千人が参拝に集まった。

ところで慶州一帯にあるすぐれた芸術作品のほとんどすべてが、統一新羅が絶頂をむかえる8世紀の中葉につくられたものだ。多宝塔もその1つである。

統一を達成した新羅は仏教を全面的に受け入れ、積極的な政策をとり、中流層や下層の民衆まで浸透していった。仏教という精神的支柱は、流亡民を定着させ、統一戦争がもたらした人的、物的損失を收拾して、仏教文化の花を咲かせたのである。高句麗や百済の技術者、学者が統一新羅文化の血となり肉となっていた。

多宝塔の作者もそんな1人で、百済の人だったという。名を阿斯達(アサタル)といった。

13.2 釈迦塔と夫婦の如く

ひとつの悲話が伝説として伝えられている。阿斯達の妻が夫を慕って新羅の国にやってくるが、造塔工は多宝塔をつくり終えたものの、釈迦塔をつくることができない。妻は面会が許されず、近くの影池で持つことにしたが、いつまでたっても池には多宝塔が映るだけで釈迦塔が映らない。妻はある日、夫が死んでしまったものと思って池に身を投げてしまう。阿斯達は釈迦塔を完成して妻に会いにいてみると、すでに妻は死んでいた…。

この伝説は、釈迦塔が別名、無影塔とよばれる由来を語ったものだ。が、この話はまた、釈迦塔がいかに苦心の作だったかも教えている。

記者は、2つの塔を何度も見比べながらこの伝説をはんすうした。釈迦塔は、率直、明快、簡潔、単純な美しさを持った塔で、多宝塔とコントラストをなす。が、フォルム自体は、当時他にもおびただしくつくられた石塔とほぼ同一である。妻を悲劇に追いやった苦心の作は、凡作だったのか?と考えてみた。

出会った韓国人の学者、建築芸術家にこの2つの塔への好みを聞いてみた。すると釈迦塔の方が好きだ、という人が実に多かった。

ソウル・オリンピックのモニュメントゲートの設計で当選した建築家の金重業(キム・チュンアブ)氏は、多宝塔のプロポーションをグラマー美人にたとえ、釈迦塔の率直、単純、簡明を、健康な男性美にたとえた。

小さな空間に、タイプを異にする2つの塔が仲よく並んでいるのは、家庭の中に夫と妻とが存在していることにたとえられるかもしれない。

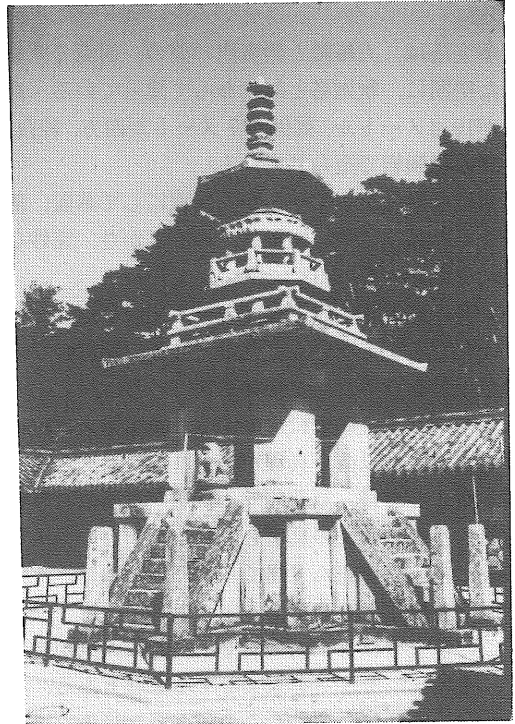
釈迦生誕の日、僧侶、信者たちは、2つの塔のまわりを念仏をとえながら歩く。

14. 南北分裂の下で

14.1 国軍をもたなかった

慶州南山の北部に、周囲3.8キロにわたる南山城址(し)がある。石垣のほとんどが崩壊して、原形を確認できるのは寺谷方面のごく一部だ。石壁の高さが3メートル。

この山城は東の明活山城、西の仙桃山城と対応



仏国寺大雄殿の前に並ぶ釈迦塔(左)と多宝塔(右)

し、王宮の月城とは日精橋、月精橋を通じて直結していた。

その北端の、慶州博物館を眼下にみる高地一帯に、3つの巨大な倉庫跡が発見された。兵器と穀物を貯蔵するためのもので、最大のものは横99メートル、縦22メートルという巨大さで、炭化した粳(もみ)が発見された。

南山城は真平王の時(591年)に築かれ、679年に増築された。

南山に2年間かよいつづけた美術史家の正木晃氏(元東国大学講師)はいう。

「新羅の歴史は上代、中代、下代と分けられます。統一して50年間はたいへん威勢がよかった。が、百年して落ちめになっていき、最終的には慶州地方しかおさえていなかった。南山城の倉庫跡は、全盛時代の国力がいかに強大だったかを示している。しかし古代の王権については分からないことが多いんです」

韓国の武士道である花郎道(ファランドー)はいっつか消滅し、日本の武士道のような発展、洗練はみなかった。

正木氏はつづける。

「花郎がなぜなくなるのか。韓国は自前の国軍

を持つことがなかった。中国との関係で、強い軍隊を持つと反乱を起こすのではないかと疑われた。新羅の全国統一も、地方の勢力を温存させた。一種の連合政権。貴族の連合体。そしてそれらの貴族は私兵を持っていた。国軍として組織することはなかった。国家の統一形態が日本とは異なっていた。それが武士道を発展させなかった理由だと思います。それに花郎は、南山の特殊な自然環境と結びついた存在でした。モンゴル軍が侵入してきてたかれた時、あまりにその軍隊が強大で、戦争にならなかったでしょう」

14.2 観光開発されぬまま

新羅最大の規模を誇った寺院、皇龍寺も、モンゴル軍によって焼かれてしまった。地上に姿をとどめない文化遺産は多く、慶州は地下が「宝庫」だと言われている。

外国軍が来ると山に逃げる以外になかった彼らは、地上的な財宝に執着する以上に、生きのびる道を探してきたことは当然だったのかもしれない。それは独自の美意識を育ててきた。

「金剛山も食べたのちの金剛山といいます」
慶州国立博物館の鄭良謨(チュン・ヤンモ)館長は

言う。金剛山は、風景の美しい山として有名だ。今後食(サン)と同音の言葉だ。

「経済発展と国防が第1で、そののちに文化です。だから予算が足りない。慶州にはいたる所に遺跡がある。こうしたらいい、ああしたらいいと思うが、国の立場としてできない。一般の観光客が見て楽しむことのできる所は限られてくる。仏国寺とか、石窟庵とか、雁鴨池(アナブチ)とか。勉強家は南山へゆく」

おびたしい仏跡のある南山は、しかし観光開発計画からは除外されている。

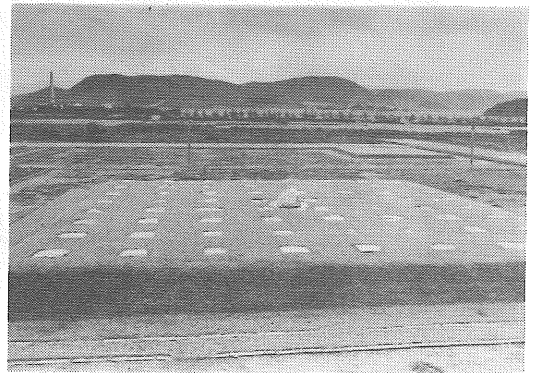
「10月2日に新しく第2別館がオープンし、雁鴨池から発掘した文化財を陳列しています。予算がないから自分たちの手で陳列した。構図、配置、色彩の工夫。これは予算がなくともできます。1つのケースのために1日かけることもある。リズムミカルに、スムーズに見られるように。これは目の問題です。精神を入れたらうまくいく。芸術家は創造すると威張っているが、どう配置するかも創造だと思う」

展示物のコンポジションが、物質に生命を与えるのだ。

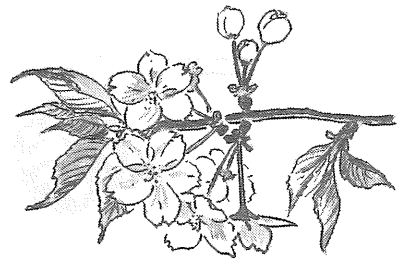
歴史や文化行政についてうかがいながら、ふと口をついて出た鄭館長自身の体験談が印象的だった。

「私は六・二五動乱の時高校生でした。共産主義の恐ろしさをしみじみ知っている。30万人以上の知識人が北に引っぱられていって、途中で殺された。父もその1人だった。生きているとすると90歳をすぎています。共産主義者は人間ではない、

と思っている。彼らは人間を物質だと考えているからです。私の姉が嫁に行ったところの父親は、北朝鮮の副首相だった。私の父を引っぱっていったのは、姉の旦那さんでした。北の人は、親子だからといって、信じられない。いつ密告されるかわからない。南北が分裂しているこんな立場なので、韓国は多少荒っぽく、安定していないところがあります」(おわり)



新羅最大の規模を誇った寺院皇龍寺跡



道・新時代

関越自動車道が全線開通した。東京―新潟が3時間半で結ばれる。1本の高速道が「日本海新時代」の幕開けをもたらしたわけだ。内需拡大の柱として大きな期待が寄せられている「東京湾横断道路」。全国の自治体でブームとなっている景観行政では歩行空間の整備が中心である。長く「道路後進国」といわれた日本だが、21世紀に向けた道づくりが急ピッチで進んでいる。昨今の「道」をめぐる話題を追ってみた。

新潟に新時代

「新幹線について関越自動車道の全通は待望久

しかったもので、大変うれしい。『高速時代の新潟』を迎えて、県としてもアクセス道路の整備などを現在、進めている最中です」(新潟県企画調整部交通対策課・長谷川義夫氏)

気の早い向きは、「新潟の時代」という。関越自動車道の全通を見越して新潟への企業進出は全国でもトップクラス。東京通産局の調べでは、昨年は長野県に次いで2位(113件)。今年上半期も広島に次いで2位。織物の縮(ちぢみ)と錦鯉で知られる小千谷市に新潟三洋電子をはじめ13社のハイテク団地が建設されている。テクノポリスで先頭をきる長岡市はいうまでもない。